

大河ドラマと日本史学

—「江^{ごう}—姫たちの戦国—」に寄せて—

福田 千鶴

私は、二〇一〇年一月に二冊目の新書となる『江の生涯』（中公新書）を世に送り出した。ご存じのように、二〇一一年度のNHK大河ドラマは、「江^{ごう}—姫たちの戦国—」である。近年、大河ドラマにかかわって歴史学界でも問題にすべき点があるからか、なにかエッセイをという依頼をうけた。もとよりエッセイを書く文才などないが、『江の生涯』の出版前後に起きた出来事や、それを通じて考えたとりとめのないことを書いて責をはたしたい。

*

二〇〇九年七月初旬。東京出張に向かう飛行機のなかで、四、五行の短い新聞記事を読んだ。二〇一一年度の大河ドラマは第五十作にあたり、その記念すべき作品は浅井三姉妹の末娘「江」に決定、とあった。

正直にまず驚いた。かつて浅井三姉妹の長女茶々の評伝『淀殿』ミネルヴァ書房、二〇〇七年）を書いており、その際に江の史料も間接するかぎりで集めていたが、史料の伝存状況は姉の茶々より「相当悪い」との実感があったからである。

史料もないのに、どうやって脚本を書くのだろうか。そう疑問に思ったが、まだこのときは他人事だった。私の関心はもっぱら茶々や豊臣秀頼にあり、誰が演じるのだろうか、とか、茶々がまた秀吉の「愛妾」として御決りの悪女に描かれるのだろうか、などと心配した程度であった。このうち、当事者として大河ドラマと日本史学の関係について考える羽目になる

とは想像すらしていなかった。

しかし、よく考えてみれば、状況認識が甘かった。「淀殿」を書いたという自覚に欠けていたといってもよい。二週間ぐらいを経た七月下旬に中央公論新社の編集者からお手紙をいただき、執筆依頼をうけた。同社には、私の『御家騒動』（二〇〇五年）を出版してもらった義理がある。幸いにもすぐに東京出張の予定があり、池袋のホテルで編集者と話すことにした。

話すといっても、こちらの腹づもりは丁重に御断りをするはずだった。というのも、繰り返しになるが、浅井江に関する史料はほとんどないという確信があったからである。小説やエッセイを書くのとはちがうから、史料がなければ研究者の出番はない。

編集者は『御家騒動』の担当者とは異なり、初対面だったにもかかわらず、なぜか意気投合した。とはいえ、執筆は別の話と想っていたところが、話し込むうちに押し切られてしまう。編集者曰く、

「今回の依頼は大河ドラマの便乗のように思ったかもしれないが、それは違う。『淀殿』を読んで、ぜひ浅井江の評伝も書いてほしいと思った。史料がないので書けないというのであれば、史料が集まって書けるようになるまで、いつまでも待つ……。今回の大河ドラマにあわせる必要はまったくない。」

「とりあえず史料を探してみます」

と生返事をして、その日は別れた。

現在、私は福岡県内の九州産業大学に勤めている。前任校は東京都立大学で、その在任中の二〇〇四年から二〇〇七年度にかけて文部科学省科学研究費「近世武家社会における奥向史料に関する基盤的研究」、二〇〇九年から三年度計画で「日本近世武家社会の奥向構造に関する基礎的研究」というテーマで奥向研究を進めており、その関係でここ数年、

鳥取県立博物館を訪ねている。同館所蔵の鳥取池田家文書は藩政機構の各部署で作成された日記の宝庫である。奥向関係の史料も豊富であり、今年度の報告書には「女中奉行日記」の翻刻を計画中である。その関係で、二〇〇九年八月にも鳥取に調査に赴いた。

史料出納までの待ち時間に、開架書架にある薄い複製史料をなにげなく手にとると、鎮守府將軍(平)国香から始まる家の由緒書があり、おもしろそうだと思つたらすぐに「淀殿」という文字が見え、目を疑つた。まだ浅井江の最初の夫佐治一成の名はうる覚えであつたが、すぐに一成の末裔の佐治家の由緒書だと理解できた。

池田輝政が名のある牢人を多く抱えていたことは有名で、池田家臣には驚くような由緒をもつ家があり、佐治家もその一つだった。佐治一成の子孫が池田家に取り立てられていたことだけでも発見だったが、池田家重臣荒尾家と佐治家が尾張時代に縁続きという関係(佐治一成の叔父荒尾善次の娘善応院は池田輝政の実母)で池田家に取り立てられたことや、佐治信方と織田犬(織田信長の妹)との間に生まれたとされてきた一成が、実は信方の弟であること、一成と江の婚姻が史料的根拠もなく天正十二年(一五八四)初めとされてきたことに修正を迫る内容が記されるなど、とても興味深い史料であることがわかつた。

こうなると、がぜん面白くなる。すぐさま佐治家の歴史調べに没頭し、三百枚近い原稿を書いた。中公新書は三百五十枚が一つの基準なので、これはまずいと思ひ原稿整理にかかつたが、それでも最初に出版社に提出した原稿は佐治関係だけで半分の量を超えていた。「浅井江の本ですから」とさらに削除を求められ、泣く泣く削つた箇所があるのは残念だが、ともかく佐治一成は神出鬼没で、相当おもしろい人物と思つた。

佐治一成のところまで書いてしまえば、あとは勢いに乗って書くだけである。しかも、不思議なことに、そのあと史料の方から近づいてきてくれて、驚きの発見の連続だった。こうして二〇一〇年三月末には原稿を書き終えていた。

私の身辺が慌ただしくなつたのは、二〇一〇年九月頃からである。夏休みを終えて大学に出てみると、雑誌や本の執

筆依頼が複数来ていた。電話でのインタビュも多く、出勤すると留守番電話が満杯になっている状態が十一月頃まで続いた。電話で答えられるものは応対したつもりだが(役にたつたとはとても思えないが・・)、執筆に関しては即、御断りをさせていただいた。大学の講義期間中に、それだけたくさんのものが書けるはずはない。一件だけ、ある雑誌の企画では、拙著『淀殿』を丁寧読んでいただいたことがよくわかる依頼であり、ちょうど『江の生涯』の校了直後だったので引受けたが、承諾後の正式依頼では、ある歴史作家の文章を送り付けられ、その文体をまねることや会話などもまじえて読みやすくするように、という無理な要求をされた。

当然、御断りである。月刊で作っている雑誌にご迷惑をかけ、高飛車に構えていると思われるかもしれないが、作家の文章をまねろというのは、研究者に対してあまりにも失礼だという感覚すらないのだろうか。このようなことに振り回されているのは、たまったものではない。そうこうしているうちに、一月末に『江の生涯』は無事に出版され、年の瀬を迎えた。

明けて二〇一一年。いよいよ大河ドラマ「江^こ姫たちの戦国」が放映開始。そうになると、またインタビュの電話が続く。多くの質問は、

「今回の大河ドラマは史実をふまえない荒唐無稽な設定が多いが、どう思うか。」

というものだった。確かに、荒唐無稽な設定は目についた。しかし、天正十二年(一五八四)までの江の生涯を史料に基づいて明らかにすることは不可能だし、それ以後もほとんど史料がないのだから虚構が多くなるのは仕方がない。大河ドラマといっても、「しょせんはドラマだから」と答えることにしていた。

しかし、相手はそのような答えでは納得しない。

「大河ドラマを見た若い世代が、あれを史実だと思ってしまうことを問題だとは思いませんか。」

確かにそうである。「新選組」(二〇〇四年)をみて歴史専攻を決めたという学生は多いし、わが勤務先の今年夏のフィールドスタディでは、「長崎と龍馬」というテーマで学生と長崎を歩くことになった。いうまでもなく、昨年度

(二〇一〇年)の「龍馬伝」の影響である。私自身も、大河ドラマに大きく影響をうけた派である。岩下志麻さんが北条政子を演じた「草燃える」(一九七九年)は、高校生の私が鎌倉時代を知るきっかけとなったし、さらに永井路子さんの「炎還」や「北条政子」といった原作をよみ、史料を屈指して描く小説の手法には、純粹に驚いた記憶がある。

大河ドラマは、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康といった超有名なとりあげの一方で、知名度の低い人物もとりあげる。たとえば、柳生宗矩は歴史好きの方や武道ファンなら柳生十兵衛の父としてよく知られた人物かもしれないが、一般的な知名度は低い。私が一番好きな大河ドラマは、故萬屋錦之介が柳生宗矩を演じた「春の坂道」(一九七一年)。ピンクレディーやキャンディーズが全盛期だった高校時代に、好きな芸能人を聞かれて萬屋錦之介・柳生宗矩と答え、同級生から変人扱いされたこともある。しかし、教科書にも載らないような柳生宗矩が、私のなかではずっと大きな存在であり、今でも柳生宗矩の評伝を書いたら歴史研究に終止符を打つてもよいと考えているくらいである。

近年では山本勘兵衛(「風林火山」二〇〇七年)や直江兼続(「天地人」二〇〇九年)なども知名度をあげた人物だろう。とくに山本勘兵衛は架空の人物ではないか、とされていたが、勘兵衛に関する史料が発見されるなど、研究上の前進があったし、直江兼続も同様で、絶版となっていた評伝が再版されて容易に入手できるようになったことなども喜ぶべきことといえよう。

このように、一般には無名だった人物の知名度が上がり、それを通じて歴史ファンがふえるということは、大河ドラマの「功」の一つといえるだろう。今回の浅井江についても、同じことがいえる。浅井茶々の場合には、歌舞伎の題材などで取り上げられており、それなりの知名度があった。しかし、江の知名度は低かったし、描かれ方も徳川秀忠の妻としての付随的なものが多く、今回のように主人公という設定は初めてではないかと思う。

それゆえ、NHKは日本放送協会として、できるだけ史実に忠実な作品を提供するという社会的責任があり、それを歴史研究者として問わないのか、とインタビュアー氏は詰問するわけである。しかし、歴史考証を担当した研究者が意見を伝えても、なかなか受け入れてもらえない、という話を仄聞したこともある。せめて史実として確定したことは準

拠する姿勢を崩さないでほしいと思うが、これに対して歴史学界はどう向き合っていくべきなのか。教科書に求めるような厳格な対応ではなくとも、社会に与える影響の大きさを考えれば、「しょせんはドラマ」という私の態度は適切だったのかと悩む。

大河ドラマの題材が決定すると、それに関連する歴史本が大量に出版される。それ自体は悪いことではないし、大河ドラマをきっかけに歴史研究が大きく前進することも「功」の一つといえよう。「篤姫」(二〇〇八年)のときも読みごたえのある研究書がいくつ出版され、女性史や奥向の研究が大きく進展したことは喜ばしいことであった。ただ、女性の史料は限られていることもあり、どの本を開いても同じ史料が使われていて、失礼ながら全体としては類似の研究書が書店に並んだような印象を持っている。江の場合は、篤姫よりもさらに史料が限られていることもあって、より不毛の状況を呈している。

大河ドラマに関連して歴史本が大量に出版される動向は「北条時宗」(二〇〇一年)以来らしく、好評を得た昨年の「龍馬伝」では百冊を超える関連本が出版されたという。三鬼清一郎氏が『歴史学研究』八七〇号(二〇一〇年九月)誌上において、こうした出版を大河便乗本と呼び、とくに専門でもない研究者が大河ドラマにあわせて関連本を矢継ぎ早に出版する状況に苦言を呈したのは記憶に新しい。今年の「江」関連本もすでに百冊を超えており、そのなかにはやはり江の時代の専門ではない研究者による便乗本がないとはいえない。

こうなると困るのは、研究史の整理が不可能になることである。私は今年度の科研報告書で、武家の女性に関する文献リストをデータベース化する予定であった。女性に関する研究書は限られていることもあって、できる限り一般書なども掲載する方向でデータを集めてきた。しかし、浅井江の関連本が百冊を超えたとすると、すべてを入手することも、完全な文献データベース化も、もはや不可能である。

一般書は切り捨てればよい、と簡単に思われるかもしれないが、他の女性に関しては展示図録、小説と歴史研究がな

いませになつたような文献なども採用しているのに、浅井江だけは削除というわけにはいかないだろう。まして一般書と思つて切り捨てた本のなかに、なにか新たな発見があるかもしれないし、江のゆかりの土地を調べた本に意外な新発見が示されているかもしれない。MOOK本の類であれば研究史から漏れるのはいたしかたないとしても、新書のような形で出版された本も無数にあり、それをどこまで研究史として採用するのか、ほとんど思考停止の状態に陥らざるをえない。

あらゆる研究がそうだと思うが、私は研究のスタートは研究史の整理にあると思つている。そのうえに、新たな課題を発見していくことが必須となる。ところが、近年の若手研究者のなかには十分な研究史整理もしないで論を立て、研究史の逆行ではないかと思えるような論文に出合うことも珍しくない……。

と偉そうなことを書いたが、これは年をとつた人間の傲慢な弁であり、無責任な発言だと今回の「江」関連本の乱立に直面して考えた。決して研究史の整理が必要ないと主張するのではない。研究史の整理は必要である。しかし、私の世代でいえば、三十年近くの研究動向を同時代的に体験しており、なんとなく研究史の流れが体得できているが、大河ドラマ関連ほどひどい状態ではないにしても、若手研究者にすれば、これだけ新旧かつ玉石混淆の文献が乱立している状況のなかで、研究史をすべておさえるというのは能力を超えることなのかもしれない。こうしたアカデミズムを揺るがしかねない文献乱立状況と歴史学はどう向き合うのか。レフリー付の文献しか研究として評価しないという方向もあるだろうが、日本史の場合には郷土史・地方史研究の豊かな土壌を切り捨てるような歴史学であつてはならないと思う。これも悩ましい問題である。

大河ドラマと日本史学との関係では、博物館の展示も問題になるだろう。毎年、大河ドラマ関連の巡回展が全国をめぐり、各地でも大河ドラマ関連で独自の展覧会が開催される。ガラス越しであっても、普段ではなかなか拝めない御影や遺物などを実際にみる機会があるのは大変ありがたいし、展示史料を採す過程で新出史料が発見されることもある。

文書記録に関しては、これまで知られていた榮昌院に伝来する浅井江の書状二点の出品が目玉であった。別に、東京大学史料編纂所が京極家伝来の書状二点を写真版で所蔵しており、原文書の所在は不明だったが、最近になって丸亀市立資料館により京極家の所蔵史料のなかに書状二点が現存することが確認されたことは良い知らせであった。これ以外にも新出史料を期待したが、江に直接関わる文書記録などの発見は今のところない。

そうした状況のなか、江戸東京博物館の努力により発見された祐天寺宮殿は注目に値する。これは修復の際に確認された墨書に「寛永五年辰九月拾五日御建立宗源院様御玉家」とあることから、「宗源院」は「崇源院」の書き誤りと判断され、「崇源院」を諡とする浅井江の宮殿と推定された。

だとすれば、私には述べておきたいことがある。拙著では、江の名前についていくつか考察しているが、諡に関してはこれまで「すうげんいん」と呼ばれてきたが、同時代的には「そうげんいん」が正しいと指摘した。右の墨書にある「宗」の字を「すう」と読むことは難しいから、今回の発見は「崇源院」の諡は「そうげんいん」であると修正する有力な根拠の一つになったのではないだろうか。

しかし、展示・図録などすべて「すうげんいん」が採用された。江戸東京博物館に限らず、拙著刊行後も「そうげんいん」としたものをいまだにみない。一次的な史料に基づいてきちんと根拠を示した研究が参照されず、展示叙述に生かされないことは、残念至極といわざるをえない。

ただ、これは博物館側のみの責任とはいえないだろう。なぜなら辞書類ではほとんど「すうげんいん」で立項されており、一般に定着したものを修正するのが難しいことは理解できるし、そのような状況を作り出した歴史研究者にこそ責任がある。管見の限りだが、拙著で示した史料以外では江戸時代の名所記などでも崇源院には「そうげんいん」とルビ（振り仮名）がふられているし、明治二五年（一八九二）に春日局の菩提寺である麟勝院の住職が執筆した『春日局伝記』でも「そうげんいん」とルビがあり、二次的な史料・文献でも「そうげんいん」としていた。こうなると、「すうげんいん」という読み方が定着したのは、近年の辞書類に研究者が根拠もなく誤った読み方を採用したことが原因と思わざるをえ

ない。

近年の身近なこととして、出版の際にルビをつけることを強く求められることが増えた。研究書であれば最終的にはわからないからと押し切るが、辞書類ではそうともいってはいられないだろう。これもさらに悩ましい問題ではある。

さきほど(九月十二日)のニュースで、来年度(二〇二二年)の大河ドラマ「平清盛」で大河史上最大のロケが敢行されたとあった。拙文が世に出るころには、注目もされない遠い過去の話になっているかもしれない。源平研究者のさらなる健闘を祈りたい。